

令和 7 年度

北陸呼吸器内科医療推進機構 (H-PARM)

会報

(2026年7月 発刊)



一般社団法人

北陸呼吸器内科医療推進機構

Hokuriku Healthcare Promotion Association for Respiratory Medicine

R7 年度 H-PARM 会報 目次と執筆者

	(頁)
巻頭言：西 耕一	3
教授コーナー：矢野 聖二	4
研究室から：南條 成輝、渡辺 知志、山村 健太	5
関連病院の近況報告：北 俊之、曾根 崇	11
入会後 1 年を振り返って： 越野 碩、下崎 琳、西村 健吾、山下 祥平、東 敬之	15
新入会員紹介： 岡 健志郎、谷本 梓、永原 拓弥、室田 倭子	20
教室だより：大倉 徳幸	24

巻頭言

H-PARM 会員の増加とご活躍を祝して

H-PARM 理事長(にし内科・呼吸器クリニック 院長) 西 耕一

一般社団法人北陸呼吸器内科医療推進機構(Hokuriku Healthcare Promotion Association for Respiratory Medicine:H-PARM)は、皆様のご協力やご支援により令和5年(2023年)8月1日に発足し、令和8年(2026年)8月1日に設立4年目を迎えることができました。

H-PARMは4本柱の事業を掲げています。4本柱の事業とは、①医学生や研修医に対する呼吸器内科専攻医の増加を図る事業、②呼吸器内科医師に対する知識の交換・診療技術の向上や研究推進に関する事業、③会員の親睦をはかる事業、そして、④一般市民に対する呼吸器疾患の啓発に関する事業です。中でも重要な事業は①呼吸器内科専攻医の増加です。

幸いなことに、令和5年(2023年)4月には、安達美桜先生、立村直也先生、南川真季先生の3名の新入会員、令和6年(2024年)4月には、笠井佑樹先生、中川友加里先生、平尾優典先生、南條成輝先生の4名の新入会員、令和7年(2025年)4月には、越野碩先生、山下祥平先生、東敬之先生、西村健吾先生、下崎琳先生の5名の新入会員、そして、令和8年(2026年)4月には谷本梓先生、岡健志郎先生、室田倭子先生、永原拓弥先生の4名の新入会員をH-PARMの仲間としてお迎えすることができました。直近の4年間で16名の仲間が増えたことは大変喜ばしく、また大変頼もしく思います。このような素晴らしい成果は、矢野聖二教授を始めとする金沢大学呼吸器内科スタッフ、そして関連医療機関の会員の皆様のご尽力の賜物です。この誌面を借りて、心より感謝申し上げます。

H-PARMの事業としては、②呼吸器内科医師に対する知識の交換・診療技術の向上や研究推進に関する事業も同様に重要です。そのためには、各地域における呼吸器内科診療のリーダーが必要です。うれしいことに、理事の柴田和彦先生が令和6年(2024年)4月1日付で、厚生連高岡病院の第15代院長に就任されました。さらに、会員の早稲田優子先生が令和7年(2025年)4月1日付で、福井大学医学部附属病院呼吸器内科の第2代教授に就任されました。心からお祝い申し上げます。このような素晴らしい成果は専ら各個人のご努力の賜物ではありますが、H-PARMの仲間から富山県および福井県における呼吸器内科診療のリーダーを輩出できたことは、理事長として大変誇らしく思います。お二人の先生方には各地域にとどまらず、幅広く国内外でご活躍していただき、私どもH-PARM会員をリードしていただけるものと確信しています。

さて、呼吸器内科診療は、医療機関の院長、教授、あるいは診療科長のリーダーシップの下、会員の皆様が各々の専門性を発揮し、各地域や各医療機関で必要とされる様々な役割をきちんと担っていただいて、はじめて北陸地区の呼吸器内科診療が充実し、発展するものであります。今後も会員の皆様のご活躍を願ってやみません。

教授コーナー

矢野 聖二

金沢大学呼吸器内科に着任してから、はや四年半が過ぎました。この間を振り返りますと、あっという間ではありましたが、多くの出来事と大きな前進がありました。

まず同門会においては、OB の先生方のご尽力により、一般社団法人「北陸呼吸器内科医療推進機構(H-PARM)」が設立され、社会的にも認知される組織として基盤が整いました。医局員も 16 名増え、組織としての厚みが増しつつあります。

診療面では、病院執行部の方針により病棟が東病棟 6 階から 9 階へ移転し、責任病床数も 25 床から 31 床へと拡大しました。これにより、より多くの患者さんを受け入れ、質の高い医療を提供できる体制が整いました。

研究環境についても、血液内科や呼吸器外科のご厚意で研究スペースの一部をご提供いただき、共同研究スペースとして活用できるようになりました。大学院生やスタッフが十分に研究に打ち込める環境が整いつつあり、研究のさらなる発展が期待されます。

また、令和 7 年 11 月 19 日(奇しくも世界 COPD デー)に、医局スペース・教授室・秘書室が医学類 D 棟 5 階から C 棟 4 階へ移転し、医局員との物理的距離が近くなったことで、より円滑なコミュニケーションが可能となりました。これに伴い、これまで曜日によって開催場所が変わっていた症例カンファレンスも C 棟 4 階で一元的に開催できるようになり、研修医や医学生にとっても呼吸器内科の活動が見えやすくなったと感じています。

院内連携の面では、令和 4 年 5 月より呼吸器外科、放射線科、放射線治療科、腫瘍内科、病理診断科とともに毎週水曜日 17 時から呼吸器カンファレンスを継続してまいりました。この取り組みを院内組織として明確化するため、令和 8 年 1 月 1 日に「呼吸器先端医療センター(ARC)」を立ち上げました。カンファレンスを通じて診断・治療方針を迅速に共有できることは、患者さんにより良い医療を提供する原動力となり、各科との連携をさらに強固にする好循環が生まれていると実感しております。

地域連携においても、北陸の先生方からの後押しを受け、令和 7 年に「北陸肺がん研究グループ(H-LINK)」を立ち上げました。H-LINK は、北陸の若手医師が自由な発想で多施設共同研究を企画し、その成果を全国・世界へ発信することを目的とした組織で、新潟・富山・石川・福井の有志施設が参加しています。すでに 4 つの研究課題が提案され、そのうち 1 つは英文誌に掲載されました。今後は良性肺疾患への取り組みも視野に入れ、さらなる発展を期待しています。

以上のように、新生・金沢大学呼吸器内科は、診療・研究・教育のいずれにおいても着実に基盤が整ってまいりました。今後も仲間を増やし、北陸の地域医療を守り、日本をリードし、そして世界へと発信していく所存ですので、よろしくお願い申し上げます。

研究室から

肺癌グループ

診療・教育

我が国のがん死亡原因第一位である肺癌の診療は、ますます重要性を増しています。胸部異常陰影の精査で紹介された患者さんの気管支鏡下生検等による診断や、病期、組織型、ドライバー遺伝子異常、PD-L1 発現等に基づいた治療を行っております。この1年、新たなPD-1 阻害薬セミプリマブ、Her2 遺伝子変異陽性肺癌で分子標的薬ゾンゲルチニブ、EGFR 遺伝子変異 (*Exon19* 欠失、*Exon21 L858R* 点変異) で EGFR、MET に対する二重特異性抗体アミバンタマブ + 第3世代 EGFR-TKI ラゼルチニブ併用療法、さらにアミバンタマブの皮下注製剤、進展型小細胞肺癌で CD3、DLL3 に対する二重特異性抗体タルラタマブが保険承認され、新たな治療選択肢が加わってきています。それぞれに特徴的な副作用もあり、総合的に全身を診る力が求められるため、外来・入院で学生、研修医、専攻医とともに丁寧に診療することを心掛け、患者さんに最善の医療を提供できるよう尽力しています。また、汎 RAS に対する分子標的薬や抗体薬物複合体 (ADC)、免疫チェックポイント阻害薬 (ICI) を用いた複合免疫療法などのグローバル第3相治験を数多く実施しています。さらに、北陸では珍しい第1相試験を木場先生中心に EGFR 阻害薬耐性後の症例に対して行っております。治験を希望する患者さんはぜひご相談をいただければ、該当試験がございますかをお調べいたしますので、お気軽にお声かけください。

研究

1) 臨床研究

北陸呼吸器内科医療推進機構 (H-PARM) では、事業の1つとして臨床研究が挙げられており、その一環として北陸肺がん研究グループ (H-LINK) が立ち上がりました。若手を中心に活発な研究提案があがってきており、金沢大学呼吸器内科の基礎研究を実臨床につなげるトランスレーショナルリサーチ (TR) も組み込みながら積極的に臨床研究を行っています。その1例として、大学院生の清水先生を中心に「多施設共同のタルラタマブの効果予測バイオマーカーの探索」が開始しており、会員のみなさまのご協力をおねがいいたく存じます。また、村瀬特任助教らは、循環血中腫瘍由来 DNA (ctDNA) の検出と静脈侵襲を組み合わせることにより、EGFR 変異陽性肺癌の術後再発を予測する手法を報告 (Murase Y et al. *Lung Cancer*. 2026.) し、学位を取得しました。

2) 基礎研究

バイオマーカーの確立や薬剤耐性の克服を目指した研究の対象を、これまでの分子標的薬に加え、ADC や二重特異性抗体 (BsAb) にも広げ、H-PARM の先生方からも共同研究として臨床情報と検体をご提供いただき、更なる発展が期待されています。中国からの留学生で

ある LIU 大学院生らは、免疫不全マウスに移植した *KRAS G12C* 変異陽性肺癌皮下腫瘍で *KRAS* 阻害薬ソラニブの薬剤耐性を誘導し、リガンド Amphiregulin が EGFR バイパス経路を活性化していることを発見し、オシメルチニブがその耐性を克服することを報告しました (Liu et al. *Oncogene*. 2026 in press.). また、村瀬特任助教らは、同様にマウス内で ADC であるエンハーツの薬剤耐性を誘導し、薬剤排出トランスポーターの過剰発現による耐性機構とその克服治療を報告しました (Murase Y et al. *Cancer Sci*. 2026). 一方、臨床的に問題となる中枢神経系転移をマウスモデルを用いて、*EGFR* 変異陽性肺癌で *ARID1A* 変異の共存がオシメルチニブ耐性を引き起こすことを南條特任准教授らがカリフォルニア大学サンフランシスコ校との共同研究で明らかにしました (Fukuda K[#], Nanjo S[#] (#co-first), et al. *JTO*. 2025.). 矢野教授は兼任されておられるナノ生命科学研究所の高速原子間力顕微鏡 (HS-AFM) を用いて、EML4-ALK 変異体の全体構造を単一分子レベルでの可視化を世界で初めて行いました (Yano S, et al. *ACS Nano*. 2026). さらに、矢野教授らは、「抗体薬物複合体投与の患者選択を可能にする PET イメージング用プローブを開発する研究」で次世代がん医療加速化研究事業の研究費を獲得し、MET をターゲットとした個別化医療の推進が期待されています。

学会

矢野教授が会長を務めておられる日本臨床腫瘍学会学術集会 (JSMO2027) が 2027 年 3 月 18 日から 20 日まで金沢 (石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ANA クラウンプラザホテル、ホテル金沢、もてなしドーム) で開催されることになりました。H-PARM のみなさまからの活発な演題ご応募と、ご協力を何卒よろしくおねがいいたします。

びまん性肺疾患グループ

診療・教育

びまん性肺疾患の診療において、今年度特に印象に残った疾患は肺胞蛋白症でした。IP 急性増悪として治療されるも剖検により肺胞蛋白症と診断された例、関節リウマチ患者の両肺すりガラス陰影に対する気管支肺胞洗浄で白濁した洗浄液を認めた例、さらに皮膚筋炎関連間質性肺炎として加療されていた患者様が自己免疫性肺胞蛋白症と診断され、全肺洗浄および GM-CSF 吸入療法により著明に改善した例など、印象的な症例を複数経験しました。急性増悪や薬剤性肺炎、感染性肺炎と考えている症例の中に、肺胞蛋白症が潜んでいる可能性を改めて認識させられました。現在このような症例の実態を明らかにするため、全国の施設に呼び掛けて多施設共同研究を準備しています(田中智先生)。

当グループでは、びまん性肺疾患症例のご紹介を広く受け入れて、積極的に精査を行っています。毎週金曜日には ILD 定期カンファレンスを開催し、相談症例およびその週にご紹介いただいた症例の今後の方針について検討しています。必要に応じて抗 MDA5 抗体や抗 GM-CSF 抗体の迅速測定、A-Cube による膠原病自己抗体の網羅的検索を行い、腎リウマチ膠原病内科や皮膚科と連携して自己免疫性疾患の診断や治療にあたっています。また、気管支肺胞洗浄やクライオ生検も積極的に施行し、細胞学的・組織学的検討を行っています。若手の先生方にも積極的に関わっていただき、BALF 細胞分画の判読やクライオ生検手技の習得を進めています。診断や治療方針に悩まれる症例、精査をご希望の患者様がおられましたら、ぜひご紹介いただけますと幸いです。

研究

(1) 臨床研究

北陸 3 県の大学病院・基幹病院と連携し、抗 MDA5 抗体陽性間質性肺炎の多施設共同研究を進めました。その結果、筋炎だけでなく皮疹にも乏しい hypodermic amyopathic dermatomyositis (HADDM) が存在し、この群は呼吸器内科を受診することが多く、診断や治療介入が遅れやすく、予後不良であることが示されました(Muto A et al. Respir Med 2026)。筋炎や皮疹を欠く症例が存在することから、間質性肺炎診療における抗 MDA5 抗体測定の重要性を示す成果と考えています。

また、まれな間質性肺疾患である胸膜肺実質線維弾性症(PPFE)の病態解明研究にも取り組んでいます。Northwestern University との共同研究により、シングルセル解析や空間オミクス解析を活用し、PPFE に特徴的な細胞集団やその局在の解析を進めています(岩崎一彦先生)。

(2) 基礎研究

肺線維症の病態として肺胞上皮の修復障害が重要視されており、近年その病態に関わる細

胞群が次々と明らかになっています。当グループでは、特にマクロファージと肺胞上皮細胞の変化に着目した研究を進めています。

慢性肺線維症モデルを用いた研究では、肺線維化病変に集積する単球由来マクロファージが線維化形成に重要な役割を果たし、その維持機構として好中球由来 CSF1 が関与することを明らかにしました(加瀬一政先生、In revision)。さらに、単球由来マクロファージが肺胞上皮細胞の異常分化を誘導し、線維化ニッチ形成に関与することを見出しています(武藤篤先生)。現在は、これらの知見をもとに新たな治療標的の探索を進めています。

また、近年承認された PDE4B 阻害薬ネラントミラストの作用機序解析も進めています。マウス肺線維症モデルを用いた検討により、ネラントミラストが肺胞上皮細胞の異常分化を制御し、正常な肺胞上皮への分化を促進することを見出しており、新たな作用機序として注目しています(赤崎恭太先生)。

さらに、製薬企業との共同研究として肝細胞増殖因子(HGF)の臨床応用に向けた研究も進めています。HGF はマウス肺線維症モデルにおいて 2 型肺胞上皮細胞の増殖を介して肺胞上皮修復を促進し、線維化を軽減することを確認しました(武藤篤先生)。本研究は AMED 橋渡し研究支援事業(シーズ A)に採択されており、将来的な臨床試験を見据えて研究を進めています。

若手医師や大学院生による研究活動も活発に行われています。データベース研究から基礎研究まで幅広いテーマに取り組んでおりますので、研究に興味のある先生はぜひお気軽にご相談ください。これらの診療・研究活動は、関連施設の先生方からご紹介いただいた症例や日頃のご協力によって支えられています。この場をお借りして深く感謝申し上げます。今後ともご指導、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

気道グループ

診療

難治性慢性咳嗽、気管支喘息や慢性閉塞性肺疾患(肺気腫)の重症例、線毛機能不全症候群(PCD)が疑われる難治性慢性気道感染症例を中心に、多くの症例をご紹介いただいております。重症気管支喘息に関しては、臨床的寛解を目指して生物学的製剤の早期導入を心がけております。重症の肺気腫症例に対する気管支バルブ治療についても実績を積み重ね、これまで4例に施行しました。引き続きご紹介いただけますと幸いです。PCDに関して当院は診断可能な数少ない施設の一つとなっております。阿保先生を中心に耳鼻咽喉科とも連携して診療を行っております。線毛運動や線毛微細構造、遺伝学的検査については保険適応のある検査で情報が得られない場合、三重大学と共同で詳しい検査が可能ですので、疑わしい症例についてはご相談いただければと思います。難治性慢性咳嗽に関してはこれまで当科で築き上げた知見を生かし、適切に病態診断を行い治療につなげるように心がけております。一方、疾患特異的な薬物療法が奏効しない、原因がはっきりしないなどで難治化する症例も存在します。言語聴覚療法(speech and language therapy: SLT)は、難治性咳嗽に対する非薬物療法として海外では以前から知られていましたが、近年本邦でも注目されつつあります。当科でも患者自身が行うセルフ SLT で効果を実感し、現在はリハビリテーション科、言語聴覚士と連携して多職種で行う SLT のシステムを構築し診療に生かしております。薬物療法抵抗性で SLT に興味のある患者がいましたら、積極的にご紹介いただけたらと思います。

研究

基礎研究では最近うれしいニュースがありました。古林先生が行っていた感作モルモットを用いた咳嗽反応に関する研究が無事アクセプトされました(Prostaglandins Other Lipid Mediat. 2026)。これまでナイーブモルモットを用いて岡崎先生、酒井先生、山村先生が行っていた気管支平滑筋収縮をトリガーとする咳嗽研究の集大成といえる結果と考えられます。武田先生は「気管支平滑筋収縮をトリガーとする咳嗽におけるアラキドン酸代謝経路の関与」を検討しており、こちらに関しても成果をご報告出来るよう研究を継続してまいります。その他のモルモットを用いた研究として、辻先生、古林先生、山村先生、大倉先生を中心に、ブレオマイシン肺線維症モデル、パパインを用いたアラミン産生モデルなどを用いて、咳嗽発生機序の解明を進めています。また、阿保先生は患者検体を用いて線毛機能や協調運動を詳細に測定し、粘液線毛輸送能の評価を試みております。各呼吸器疾患において気道線毛運動を詳細に測定することによって、線毛機能の観点から病態を評価する方法の確立を目指しています。

臨床研究では、阿保先生が PCD のスクリーニングにも重要な鼻腔 NO の測定を試みておりましたが、NIOX Vero®にて鼻腔 NO を推定する方法をまとめ報告しました(J Thorac Dis. 2026)。古林先生とともに、様々な疾患における鼻腔 NO の測定を継続しています。また、多く

の先生方にもご協力いただいている「能登半島地震後の粉塵曝露後自己免疫性肺胞蛋白症の発症に関する前方視的調査」を継続中です。これまでも多くの症例をエントリーいただいておりますが、引き続きご協力のほどよろしくお願い申し上げます。大倉先生は「慢性咳嗽患者に対するセルフ SLT の有用性に関する多施設共同前向き観察研究」を立ち上げ、現在症例集積中です。当院における取り組みは 2025 年の咳嗽学会でも報告しましたが、難治性慢性咳嗽治療におけるパラダイムシフトとなり得る取り組みであり、当院を拠点として全国的な普及を目指して参ります。また、胸部 X 線動態解析を用いた呼吸機能評価に関する観察研究を継続中です。山村先生は「令和 6 年能登半島地震に伴う災害が呼吸器疾患患者に与えた健康への影響」について、金沢大学附属病院における症例を解析し、2026 年の呼吸器学会で報告する予定です。今後は能登地区の医療機関にもご協力いただき調査を継続する予定です。また、「咳受容体感受性と気道上皮線毛運動が肺非結核性抗酸菌症の発症と経過に及ぼす影響」について、多施設共同研究の研究責任施設として研究継続中です。その他、原先生がされていた研究を引き継ぎ、特定臨床研究として「咳嗽の発生機序に対するゲーファピキサントの影響の検証と難治性慢性咳嗽に対するゲーファピキサントの効果と安全性の評価」、「アストグラフ法を用いたプロボコリン[®]吸入による誘発咳嗽数の基準範囲の設定試験」を古林先生とともに継続中です。

その他

2026 年 2 月 21 日、「第 32 回アレルギー疾患の講演と相談会」にて、山村先生の総合司会のもと、古林先生が気管支喘息について講演を行い、地域社会への啓発活動に取り組みました。

関連病院の近況報告

国立病院機構金沢医療センター
国立病院機構金沢医療センター呼吸器科部長
北 俊之(平成 5 年入局)

国立病院機構金沢医療センターは、全国 140 病院で構成される国立病院機構の一員であり、令和 5 年には創立 150 周年という節目の年を迎えました。金沢市の中心街に近い東側の小立野台地に位置し、日本三名園の一つである特別名勝兼六園に隣接しています。病院の周りを土堀がぐるりと取り囲んでおり、8500 坪の敷地を囲む土堀の長さは 282 メートルあります。かつて「加賀八家」と呼ばれた加賀藩家老のひとつ奥村家の屋敷跡に建てられています。皆様、衛戍(えいじゅ)病院をご存知でしょうか。金沢衛戍病院は、金沢医療センターの前身であり、明治 6(1873)年、金沢城跡内に置かれた歩兵部隊の病院として設けられ、傷病兵が収容されました。部隊の増加に伴って、明治 32(1899)年、現在地・金沢市出羽町(現下石引町)に新築され、昭和 20 年(1945 年)の終戦に至るまで多くの傷病兵の治療に携わってきました。終戦により、昭和 20 年 12 月、国民を対象とする国直営の医療機関・厚生省の国立金沢病院として再発足しました。平成 16 年には、独立行政法人国立病院機構「金沢医療センター」に名称変更し、現在に至っております。

当院は、標榜診療科が 23 科の総合病院(554 床)です。平成 19 年 1 月には地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、さらに、平成 20 年 4 月には県内初の「地域医療支援病院」に指定されて以来、北陸の基幹病院として地域医療に貢献することを使命としてきました。特に「がん診療」「循環器・血管疾患診療」「周産期医療」「身体合併症を有する精神疾患診療」さらには「災害医療」に対して組織横断的な体制を構築してきたところです。また、国立病院機構というネットワークの強みも活かし、診療面での協力体制はもとより、教育研修事業や臨床研究事業にも積極的に参加することにより、質の高い医療を提供できるよう取り組みを行っているところです。

平成 24 年 7 月には、原子力センター、手術部、中央放射線部の増改築が施行され、地下 1 階、地上 3 階の「中央診療棟」が完成し、CT 室、放射線治療室、小線源治療室、アイソトープ室などが移設されました。また、北陸初のハイブリッド血管撮影室が新設されました。この新しい中央診療棟は、壁の色が茶色になっており、当院既存の建物の薄緑色とは違う色となっています。これは、市の景観条例に配慮したもので、兼六園等周囲の歴史的遺産・観光資源により調和した色調となっています(兼六坂から上がって来ると、色の違いに気づきます)。

令和 2 年(2020 年)に新型コロナウイルス感染症、そして令和 6 年(2024 年)1 月 1 日は令和 6 年能登半島地震という大きな災害に直面し、これらの経験から改めて浮き彫りとなったのが地域における医療連携の重要性であります。ここ数年、当院では感染や災害につよいハードにするため、さらには地域との連携強化も考慮し、入退院支援センター、一般外来、救急外

来、小児・産婦人科病棟、集中治療室等の改修をすすめてきました。また、PHR(パーソナルヘルスレコード)はじめ医療のDX化にも取り組んでいるところです。

呼吸器内科は、金沢大学呼吸器内科出身医師の5名と非常勤医師1名の合計6名で構成されております。令和8年(2026年)度は新屋智之(2000年卒)、高戸葉月(2001年卒)、原椋(2019年卒)、岡健志郎(2023年卒)と月曜日午前の外来担当の非常勤の渡辺知志です。

診療面に関しては、日本呼吸器学会、日本呼吸器内視鏡学会、日本アレルギー学会、日本臨床腫瘍学会の認定教育施設であり、より専門的なガイドラインに沿った医療を提供するとともに、「病気」を診るのではなく、「人」を診る全人的医療を心がけています。胸部悪性腫瘍、呼吸器感染症(肺炎、肺結核、COVID-19など)、気管支喘息・COPD、間質性肺疾患、慢性呼吸不全、睡眠時無呼吸症候群などあらゆる呼吸器疾患を診療しています。気管支鏡検査は年間130件前後であり、2023年11月に導入したクライオバイオプシーも積極的に実施しております。令和6年度から始まった医師の働き方改革働き方改革にも取り組んでおり、宿直翌日は原則1日休日となっております。また、土日祝日の病棟業務や救急からの呼び出しは当番医を決めて対応しております。

教育面に関しては、金沢大学のコアローテーションの学生や初期研修医(基幹型、協力型)を積極的に受け入れており、毎月1名の初期研修医を順次指導しております。研修医からの評判も良く、将来、呼吸器内科の仲間が増えてくれることを期待しております。

私たちは、土堀の石垣のように皆で支え合う暖かい病院であるよう、日々努力しています。ロゴマークは、当院の周囲を取り巻く300年余の歴史がある戸室石(とむろいし)の石垣と土堀、そして正面玄関前の楠(くすのき)の葉を表しています。「信頼される医療の提供を基盤として、国が進める医療政策を推進」するとともに、「地域医療に貢献する」ことが最重要課題と考えています。これからも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



石川県立中央病院
石川県立中央病院 呼吸器内科科長
曾根 崇(平成 11 年入局)

石川県立中央病院は、金沢市彦三に戦後誕生した日本医療団中央病院を引き継ぐ形で、1948 年に発足しました。その後、1970 年代には長町へ移転し、長く金沢の中心市街地で県民の健康を支えてきました。2003 年の石川県庁の鞍月移転などに伴い、周辺の副都心開発が加速し、病院も、2018 年に現在の鞍月東 2 丁目へと全面移転しました。北陸自動車道のインターチェンジから車で約 10～15 分、主要幹線道路である金沢外環状道路にも近接しています。この優れた立地により、金沢市内だけでなく、能登地方や加賀地方、さらには富山県西部などの広域からも迅速にアクセスできるという、救急・急性期医療において極めて重要な地理的優位性を備えています。

当院は、病床数 600 床以上と県内では比較的大規模な病院であり、主に高度急性期医療と政策医療を担っています。救命救急センターおよび基幹災害拠点病院に指定されており、24 時間 365 日体制で重症患者を受け入れています。屋上にはヘリポートが設置されており、ドクターヘリや防災ヘリを用いた遠隔地(特に能登半島の過疎・中山間地域や離島など)からの超急性期患者の緊急搬送に利用されています。また、地域がん診療連携拠点病院(高度型)としてがんの集学的治療を行うほか、脳血管疾患や心臓病などの循環器疾患、精神救急にも対応しており、総合周産期母子医療センターを備え、リスクの高い妊産婦や新生児の医療(NICU 等)にも 24 時間体制で臨んでいます。

呼吸器内科では 2024 年度に 30 数年にわたって当院に勤務され科長を勤められた西耕一先生が、10 数年にわたり病棟責任者として数多くの後輩を指導されてきた西辻雅先生が退職されました。西耕一先生は、にし内科・呼吸器内科クリニックでの多忙な診療をされながら、週に 1 回、外来診療および私達の診療の「指南役」としてお勤めいただいています。

現在呼吸器内科は 6 名(うち 1 名は腫瘍内科所属)で診療にあたっています。対象疾患は、肺癌が多く石川県内では金沢大学附属病院について 2 番目に多い患者数になります。気管支鏡は肺癌診断のほか、抗酸菌症、間質性肺炎の他、稀に異物除去など年間、約 300 件以上を例年実施しておりスタッフの武田先生、中積先生が後輩の指導にあたっています。肺癌の薬物療法は、免疫チェックポイント阻害薬や、分子標的薬、BiTE 抗体などの標準治療を行うほか、新規薬剤の治験に積極的に取り組んでいます。また気道グループの武田先生が赴任後、気管支喘息や COPD に対する治験も増えています。

主要疾患以外では急性期病院の特徴から、他の医療期間に通院患者の呼吸器感染症や間質性肺炎、COPD、気管支喘息の急性増悪、喀血、気道内異物など様々な診療を担うことが多く、急性期の状態を乗り切ったのちには、すみやかに近隣の医療機関にリハビリ転院をお願いしています。連携いただいている医療機関には大変感謝しております。このような診療スタイルから、病棟業務は緊急入院、退院、また緊急入院と目まぐるしいものの、中堅の医

師、若手医師ともに協力しながら診療に取り組んでくれています。

H-PARM の発足を受け、北陸での呼吸器診療に携わる医師が少しでも増えることを期待しております。会員の先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



(2026 年度 呼吸器内科メンバー)

入会后 1 年をふりかえって

越野 碩

卒後 4 年目の越野碩と申します。

福井県坂井市出身で、高知大学医学部を卒業し、福井県済生会病院で2年間初期研修を行いました。その後、金沢大学呼吸器内科に入局させていただき、富山市民病院で1年間専攻医として勤務致しました。現在は石川県立中央病院で勤務しております。

専攻医1年目の当初はカルテの使い方や病棟業務など慣れないことが多く、この先やっつけけるのかとてつもない不安にかられたことを覚えております。また、富山市の救急は輪番制であり、絶え間なく来る患者をさばきながら、自分の責任で診断や帰宅の可否を判断することにも強い不安がありました。しかしながら、呼吸器内科の先生方や他科の先生方、コメディカルの方などに支えられながらなんとか1年間走りきることが出来ました。呼吸器内科医として、そして一人の医師として知識・経験ともに非常に未熟であり、まだまだ数多くの症例を経験して成長していかなければいけないと日々強く実感しております。

富山市民病院でも、そして現在勤務している石川県立中央病院でも素晴らしい先生方の近くで学ばせていただいております。非常に感謝しております。

これからもご迷惑おかけすることが多々あるとは思いますが、引き続きご指導のほど何卒よろしくお願いいたします。

下崎 琳

呼吸器内科に入局してはや1年経過しました。地域枠で入学したため、医師3年目は呼吸器内科医員がいない珠洲市総合病院での勤務となりましたが、同じ勤務先の先生方と連携し、呼吸器症例についてはLINE やメールで呼吸器内科の先輩に相談させていただいたため、大変有意義な一年を過ごすことができました。珠洲市には観光で訪れたことはありますが、震災後どのような状況であるのか不明であり、不安でいっぱいのなか勤務を開始しました。週に4回の外来や救急、病棟管理、片道3時間の転院搬送、書類業務など慣れないことが多くありました。主治医制でしたが困ったときはお互い助け合い、わからないことは上の先生に質問しやすい環境でした。また11月から3月まで恵寿総合病院へ気管支鏡の勉強に伺っていましたが、お忙しい中恵寿総合病院の呼吸器内科の先生にご指導いただき、珠洲市総合病院の先生にも外来業務を交代していただくといったご配慮をいただいたことに大変感謝しております。肺がんやNTM、間質性肺炎など呼吸器内科の専門的な領域について、これからも周りの同期や先輩方にご教授いただき、日々精進して参ります。

西村 健吾

昨年度は石川県立中央病院にて勤務させていただき、肺癌をはじめ、感染症、間質性肺炎、COPD・喘息など、多彩な呼吸器疾患を経験させていただきました。また、年間 300 件近い気管支鏡検査に加え、胸腔ドレーン留置や胸水穿刺などの手技にも多く携わる機会をいただき、呼吸器内科医としての基礎を学ぶ大変貴重な 1 年となりました。

診療の中では、主治医としての責任の重さを実感する場面や、判断に迷う場面、自身の知識や経験の不足を痛感する場面が多くありました。特に、診断に難渋した希少肺癌症例では、最終的に診断には至ったものの、病勢の進行が速く、治療開始まで到達できなかった経験がありました。診断から治療までの過程において、より早く的確に介入するための知識、判断力、経験の重要性を強く感じ、呼吸器内科医としてさらに研鑽を積む必要性を痛感いたしました。

一方で、上級医の先生にご指導いただきながら、鑑別診断や治療方針を自分なりに考える機会も増え、患者さんやご家族への説明においても、できるだけ分かりやすく、納得していただける伝え方を意識するようになりました。また、看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、MSW をはじめとした多職種の方々と連携することの大切さも学ばせていただきました。

今年度は黒部市民病院で勤務しております。地域医療の現場では、呼吸器疾患に限らず幅広い対応が求められる場面も多く、日々学ぶことの多さを実感しております。昨年度十分にできなかった後輩や学生への指導についても、今年度は自分自身も学び続けながら、研修医や学生とともに成長できるよう努めたいと考えております。

まだまだ未熟ではありますが、石川県立中央病院で学ばせていただいた経験を糧に、呼吸器内科医としての専門性を高め、地域医療にも貢献できる医師を目指して精進してまいります。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

東 敬之

専攻医 1 年目の昨年度は、金沢医療センターにて勤務させていただきました。臨床および学術の両面において多くの学びを得ることができ、非常に充実した 1 年間であったと感じております。

着任当初は不慣れな点も多く、初診・再診外来、病棟管理、気管支鏡検査、内科当直など、日々の業務をこなすことに精一杯の状況でした。専攻医として求められる責任は研修医とは大きく異なり、重圧や不安を感じる場面も少なくありませんでした。しかしながら、上級医の先生方が親身にご相談に応じてくださり、熱心にご指導くださったおかげで、次第に自信を持って対応できる場面が増え、呼吸器内科の魅力を実感することができました。また、学会発表の機会を数多くいただいたほか、論文作成についてもご指導を賜るなど、学術面においても大変多くのことを学ばせていただきました。ご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

今年度は厚生連高岡病院での勤務となります。これまでに培った知識と経験を活かしつつ、さらに新たな知識・技術を積極的に吸収できるよう、精一杯努力してまいります。まだまだ未熟な身ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

山下祥平

内科専攻医、そして呼吸器内科医として働き始めてから1年が経過しました。昨年度は厚生連高岡病院で勤務し、多くの経験を積むことができました。

振り返ると、当初最も苦労したのは外来診療でした。限られた時間の中で診断や治療方針を考え、患者さんへ説明を行う外来診療は、知識も経験も十分ではない私にとって非常に負担の大きいものでした。例えば慢性咳嗽のような診断や治療に難渋する症例では、何から考えればよいのか分からず戸惑うことも多くありましたが、その都度上級医の先生方から丁寧にご指導いただき、少しずつ各症候・各疾患へのアプローチを学ぶことができました。

この1年間で様々な呼吸器疾患を経験しましたが、なかでも肺癌診療に携わる機会が非常に多くありました。化学療法によって腫瘍が縮小した際には、患者さんと同じように嬉しさを感じ、治療の意義ややりがい強く実感しました。一方で、終末期医療や緩和ケアに関わる場面も多く、主治医として患者さんを看取る経験も重ねました。患者さんやご家族との対話を通じて、疾患そのものだけでなく、その人の生活や人生に向き合うことの重要性を学ばせていただいたように思います。

またこの1年を通して、「診断」や「治療」は臨床医の仕事の一部に過ぎないことも実感しました。患者さんやご家族との継続的なコミュニケーション、退院支援や療養環境の調整、多職種との連携、紹介状や返書の作成、退院サマリやレセプト業務など、学生時代には想像していなかった多くの業務があることを初めて知りました。昨年4月には戸惑うことばかりでしたが、1年が経過しようやくこれらの業務にも慣れてきたように感じています。

今年度からは富山市民病院で勤務しておりますが、今後も謙虚な姿勢を忘れず、一つ一つの経験を大切にしながら研鑽を積んでまいりたいと思います。まだまだ未熟ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

新入会員紹介

岡 健志郎

卒後 4 年目の岡健志郎と申します。

振り返ると、この 1 年は私にとって多くの出来事がありました。研修医修了後は整形外科に所属していましたが、退職し、昨年 9 月から金沢大学呼吸器内科で勤務させていただくことになりました。外科から内科への転向で、当初は慣れないことばかりでしたが、金沢大学の先生方に支えていただき、何とか 1 年を乗り切ることができました。今年 4 月からは金沢医療センターに異動となり、現在も周りの先生方に支えていただきながら勤務しております。

この 1 年で強く感じたことは、自分で考えることの大切さです。3 年目は知識や経験が乏しく、周囲の先生方に頼ることが多くありました。経験も知識も豊富な先生方の意見を伺い、それらを統合して結論をだせばよいと思っていました。もちろん、そのような意思決定の過程も大切ですが、患者さんと最も長く向き合い、最も多くの情報を持っているのは主治医である自分です。だからこそ、自ら考え、責任を持って結論を導く姿勢が必要であると感じました。

また、整形外科から呼吸器内科へ転科したことで、診療科が違っても仕事に求められる本質は共通していると感じました。整形外科を辞職した当初は、「自分には向いていない」「手術が怖い、失敗が怖い」といった思いが強くありました。しかし、呼吸器内科として働く中でも、自分の適性や仕事に対する恐怖を感じる場面は少なからずありました。そうした不安に負けず、言い訳をせず、踏ん張って仕事に向き合う姿勢が、自分にはまだ足りていなかったのだと思います。

最後に、突然加わった私を温かく迎え入れてくださった金沢大学呼吸器内科の先生方、そして現在ご指導いただいている金沢医療センターの先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

谷本 梓

昨年末より金沢大学呼吸器内科に入局させていただきました谷本 梓と申します。

これまで大学病院での勤務経験はありますが、多くの諸先輩方が築いてこられた医局の一員となり、改めて身の引き締まる思いでおります。

私は金沢大学を卒業後、がん研究会有明病院、金沢大学がんセンター(現 腫瘍内科)に勤務し、2021 年から米国 MD アンダーソンがんセンターに研究留学しておりました。

5 年間の留学期間中に、エビデンスは大きく変化しており、日々学び直すことの多さを実感しております。

諸先輩方はもちろんのこと、若手の先生方にもご指導を仰ぐことが多々あるかと存じます。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

永原 拓弥

この度、金沢大学呼吸器内科に入局させていただきました卒後 3 年目の永原拓弥と申します。小松高校を経て金沢大学を卒業し、地域枠医師として初期研修を加賀市医療センターで行い、現在は穴水総合病院に勤務させていただいております。

学生時代は卓球部に所属し、顧問を務めておられる矢野教授には大変お世話になりました。また、研修医時代には木場先生や岩崎先生にご指導いただき、呼吸器診療の奥深さを学びました。

諸先生方のお人柄に惹かれて入局を決意した要素は大きいですが、当科は common disease はもとより多様な希少疾患があり興味の尽きない分野と考えております。臨床の研鑽を重ねるとともに、研究にも意欲的に取り組み、呼吸器疾患への理解をさらに深めてまいります。

改めまして、偉大な先生方を師と仰ぐことができることを嬉しく思います。まだまだ未熟で、ご迷惑をおかけすることも多いかと存じますが、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

室田 倭子

金沢大学呼吸器内科に入局させていただきました、室田倭子と申します。この度は新入局員として温かく迎えてくださり、誠にありがとうございます。

金沢市生まれの津幡町育ちで、出身大学は金沢大学です。初期研修 1 年目は小松市民病院、2 年目は金沢大学附属病院で過ごしました。

呼吸器内科は悪性腫瘍、気道疾患、間質性肺炎など、幅広く多彩な疾患を診療する分野であり、診断における手技や治療方法も様々で、その学べる領域の多さに大きな魅力を感じました。また呼吸機能の低下は患者様の QOL や生命予後に大きな影響を及ぼしていると日々の診療を通して痛感し、そのような患者様の診療に携わることに、大きな責任とともにやりがいを感じております。

まだまだ未熟な身ではございますが、一日も早く知識と経験を身につけ、一人でも多くの患者様の力になれるよう、また医局の一員として貢献できるよう、日々研鑽を重ねてまいりたいと存じます。至らぬ点多々あるかと存じますが、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

教室だより

2025 年 11 月、C 棟 4 階に医局を引っ越しました。

医局員一同、心機一転して診療、研究、教育、地域医療に貢献できるようこれまで以上に精力的に活動を展開してまいります。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2025 年 8 月～2026 年 7 月における金沢大学呼吸器内科学講座在籍者を以下に記します。

令和 7 年度

教授:矢野聖二(科長)

特任准教授:丹保裕一(地域呼吸器症候学講座、研究医長)

渡辺知志(地域呼吸器症候学講座、教育医長)

講師:南條成輝(外来医長)

助教:阿保未来(保健管理センター)、大倉徳幸(医局長)、山村健太(病棟医長)、古林崇史

特任助教:木場隼人(地域連携呼吸器内科学講座)

医員・大学院生:湯浅瑞希、赤崎恭太、上田宰、野村俊一、武藤篤、岩淵佑、清水崇弘、

村瀬裕哉、岡健志郎、劉一鋒

内科専攻医:安達美桜、立村直也、南川真季

教室スタッフ:堂林淳子(秘書)、本田静香(事務)、柏野美紀(研究補助員)、

五ノ井香織(事務)

令和 8 年度

教授:矢野聖二(科長)

特任准教授:南條成輝(地域呼吸器予防医学講座、外来医長)

渡辺知志(地域呼吸器症候学講座、教育医長)

講師:谷本梓(研究医長)

助教:阿保未来(保健管理センター)、大倉徳幸(医局長)、山村健太(病棟医長)、古林崇史

特任助教:木場隼人(地域連携呼吸器内科学講座)、村瀬裕哉(地域呼吸器予防医学講座)

湯浅瑞希(附属病院)、新井祥子(地域呼吸器症候学講座)

医員・大学院生:、赤崎恭太、野村俊一、武藤篤、岩淵佑、清水崇弘、岩崎一彦、劉一鋒

内科専攻医:笠井祐樹、中川友加里、平尾優典

教室スタッフ:堂林淳子(秘書)、本田静香(事務)、柏野美紀(研究補助員)、

五ノ井香織(事務)



(令和7年度金沢大学呼吸器内科学講座在籍者 金沢大学宝町キャンパスにて)